

向田邦子と故郷もどき

話を聞いた人…井上育子

（かごしま近代文学館学芸員）

鹿児島市城山町にある「かごしま近代文学館」。市内の文学振興や文化向上を目的に、1998年開館。鹿児島にゆかりのある近代文学に関する資料を収集・保管するほか、展示公開も行っています。なかでも、向田邦子に関する所蔵品を軸とした企画展の充実度は、全国でも類を見ないほど。学芸員の井上さんから、文学館のありかたや向田文学の魅力を伺いました。



井上 育子（かごしま近代文学館学芸員）
1975年熊本にて生まれ、出水、加世田で育つ。鹿児島女子短期大学教養学科卒業後、鹿児島市立図書館の勤務を経て、2000年より当館に勤務。産休、育休を取得しながら2019年まで向田邦子の特別展・企画展を担当。現在も常設展「向田邦子の世界」を手かけ、向田にまつわるメディア対応も行う。

かごしま近代文学館
鹿児島市城山町5-1
tel.099-226-7771
※裏面[鹿児島中央駅～市役所]ギャラリー欄⑩を参照。

――

――

｜ 全国でもユニークな文学館

――

かごしま近代文学館は、鹿児島にゆかりのある28人の作家や鹿児島を舞台にした作品資料を収集・保管し、企画展を通じて、多様な視点から紹介しています。全国的に珍しいのは、児童向けの文化施設「かごしまメルヘン館」を併設しているところ。かごしまメルヘン館は、遊びながら絵本や童話の世界を体感できるミニアスレチックやトリックアートのほか、親子で絵本を楽しむコンテンツを備えています。建物は、入口から右手にかごしまメルヘン館、左手にかごしま近代文学館が建っているため、幼いころから童話や絵本の世界に触れて育ち、中高校生になったら近代文学への導線が出来ていることが大きな特色です。文学館というと研究色が強く敷居が高いイメージを持たれがちですが、子どもたちがたくさん遊びに来る場所で

もあるので、一般的な文学館より気軽に訪れていただきやすいかと思えます。

いまも昔も、鹿児島は歴史と美術が強い街です。例えば、薩摩藩は明治維新で重要な役割を果たしましたが、文芸界では文芸雑誌『明星』や『白樺』、『スバル』が創刊され、鹿児島にはそれらに携わった方が大勢いました。『明星』は与謝野鉄幹・晶子夫妻が、『白樺』は薩摩川内市にゆかりのある有島三兄弟、『スバル』は吉井勇と、本館の常設展で紹介している作家たちも文芸誌に関わっていた方が多くいます。美術界では鹿児島出身の洋画家・黒田清輝、養父であり歌人の黒田清綱の展示も行っています。また、「改造社」を創業した鹿児島県出身の実業家・随筆家の山本實彦からの潮流も目を見張るものが。それを紐解いていくと、芥川賞候補に挙げられた作家・古木鐵太郎や谷崎潤一郎、志賀直哉など、著名な作家につながっていきます。当時の売れっ子たちを支えた、改造社の功績は大きいと思います。一方、鹿児島に移り住んだ椋鳩十や島尾敏雄、戦後文学を代表する作家・梅崎春生など、生まれ故郷ではない鹿児島での暮らしを作品に落とし込む作家もいて、外からの視点で鹿児島の魅力を紡ぐ作品が多いです。いまも鹿児島出身で活躍されて



上:かごしま近代文学館・かごしまメルヘン館の外観。下:自宅リビングの再現も見所の向田邦子の展示場風景。

いる作家もありますが、鹿児島をテーマに書いている県外出身者が多い。鹿児島を“故郷もどき”と呼んだ向田邦子もそのひとりですね。

――

｜ 向田邦子から鹿児島を視る

――

向田邦子は1929年生まれ、東京出身の脚本家であり、エッセイスト、小説家。1939年に保険会社に勤める父親の転勤に伴って、10歳からの2年3カ月を鹿児島で過ごしました。これが向田と鹿児島のつながりです。当時の住まいは鹿児島市平之町で、学校は鹿児島市の山下尋常小学校でした。かごしま近代文学館から目と鼻の先のエリアで暮らしていた、ということになります。鹿児島県立博物館や鹿児島中央公民館、山形屋は、いまも当時の建物が残っているので彼女も目にしていたはずです。当時の同級生たちにインタビューをした際は、建物の話題がよく出ていたので、彼女の暮らした風景を身近に感じていただけるかもしれません。ちなみに、その同級生のなかのエッセイ『鹿児島感傷旅行』で彼女をご案内された「喫茶メルヘン」の方もいっちゃって、店へも訪れたそうです。いまも喫茶店はその娘さんが引き継いで営業を続けており、全国からファンが足を運んでいるようです。



鹿児島時代の同級生にも着たという、向田が気に入っていたフィリップ・サルベのシャツ。

――

向田文学から見える鹿児島の魅力は、ずっと住んでいると見えない鹿児島に触れられるところ。2泊3日の『鹿児島感傷旅行』のとき、巡った場所はいわゆる観光地だったのですが、桜島について「七つの色に変わるという定説通り」と表現されました。日ごろ桜島を目にしているも、日常すぎてとてもそのようには見えませんよね。鹿児島名物の両棒餅も作中に登場しますが、私自身は日常のおやつとしてほぼ食べに行くことがない。県外のお客様から「両棒餅をよく食べるんですか?」と聞かれるのですが、作品を通して両棒餅という郷土のお菓子があることを知っていただけなのは良いですよ。

転勤族の父親に伴って全国各地を転々と暮らした向田が、特に愛着をもった土地、鹿児島。それは時代背景も大きく影響していました。戦争の足音が聞こえる頃ではあったものの、まだ激化しておらず、のんびりと暮らしていたと思います。家族7人がみんな揃っていましたし、ちょうど年齢的にも小学3～4年生の、一番無邪気な色々なことを吸収できる時期に過ごしていたので、良い記憶が多かったのではないか。東京から来たということもあり、「分限者どん」と言われるなど、鹿児島での生活は裕福なものであったと思われます。妹の和子さんも、家族みんなが鹿児島のことが好きだった、と仰っていて、引越した後も鹿児島の話題がよく出たと。さまざま要素が混ざり合って良い思い出が多かった場所であり、「故郷もどき」と呼んだ理由だと思いますね。彼女が乳がんを患って手術後にエッセイの連載を始めるのですが、最初に書いたのが『薩摩場』。自身が病気になったときに、良い思い出がよみがえって、鹿児島のことを思い出してくださったのだなと感じました。

――

｜ つかまえられそうでつかまえない

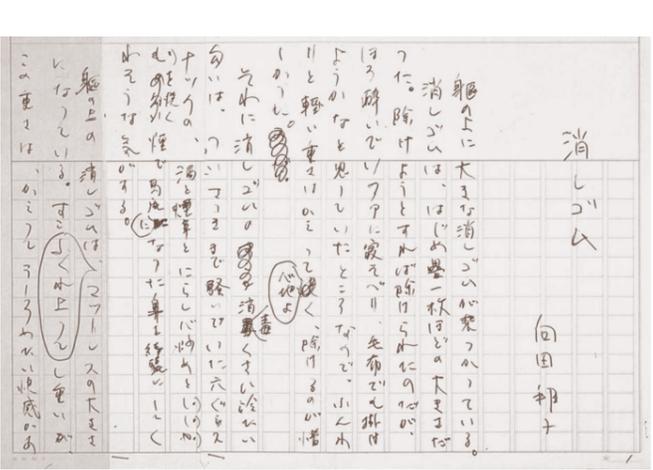
――

没後40年以上が経っても色あせない向田文学。数々の作品とともに、向田邦子というひとりの女性としても注目され続けています。仕事ができ、おしゃれでライフスタイルもかっこい

いのに、おっちょこちょいなところもある。“隣のデスクで仕事をしている先輩のお姉さん”のような感じがする。彼女のキャラクターが多くの共感を得て、女性ファンがたくさんいるのだと思います。一方で、作品を読んでいると、どこかで突き放されるような感覚も。憧れても手が届かないところにいる、例えるなら“しっぽがたくさんある猫”のような人にも感じられます。一筋縄ではいかなくて、つかまえられそうでつかまえられる。それがまた魅力ですね。企画展に訪れるお客様の多くが、彼女のライフスタイルに興味がある。もちろんその先には小説もあるので、展示ではその両面の魅力を伝えていきたいですね。まずはエッセイとライフスタイルを混ぜ合わせて知っていただいて、小説も読んでいただくようなかたちが向田文学を深めることになるかと思います。

また、彼女は立ち止まらずに、常に前へ前へと進んでいた人。脚本家時代も、当時、倉本聰や山田太一と同世代で、脚本家一本でも大成されていた方だとは思いますが、「活字で未来に残していきたい」とエッセイや小説の世界に足を踏み入れた。当時はかなり珍しいスタイルでした。いまは珍しくないかと思いますが、当時はずいぶん叩かれてしまう時代でしたから。51歳でお亡くなりになりましたが、好奇心が旺盛でいつになっても、次の挑戦をしていた方です。きっと亡くなられていなかったら、次の何かをされていなかったら、次の何かをされたのでは、と思いますね。ひとつのところに留まっていない、それが原動力になっていたのではと感じます。

展示の企画にあたって、扱いが難しいのが脚本です。台本を展示するだけだと、その魅力がなかなか伝わりづらい。これを解決するために2022年から始めたのが、「脚本リーディング講座」。1977年のテレビドラマ『毛糸の指輪』の脚本をテキストにして、参加者が三人一組になって演じて読みました。そこで分かったことは、セリフがまったく古びていない。公衆電話など、いまはほとんどない小道具なども登場するのですが、日常のシーンを描いているので言葉がスツと入ってきます。参加者がセリフを読むと会話が生き生きとしていて、向田の脚本のすばらしさを実感しました。向田ファンの参加者はあまりいなかったのですが、この講座をきっかけに作品やライフスタイルに興味をもってくださったら嬉しいです。



常設展示で展示中のエッセイ「消しゴム」の原稿。

本館では毎年、向田作品とライフスタイルの紹介を交互に行っているのですが、彼女のファンは本当に幅広いのが特徴です。一冊だけ読んだことがあるという方もいっちゃれば、とても知識が豊富なファンも。どんな方にも楽しんでいただける展示をつくるのが目標ですね。現在の常設展で、2021年に見つかった向田の音源を聴くことができます。これは直木賞を受賞した『思い出ランプ』についての読者とのやり取りですが、「100人いれば100通りの読み方がある」と仰っていました。どの作家にも言えることですが、展示をご覧いただいて、初めての方は本を手にとって読んでみたくなる。何度も作品を読んだことがある方でも、家に帰ってもう一度本をめくっていただけるような展示づくりを目指しています。彼女自身が仰っていたのと同じく、「向田文学とはこういうもの、向田はこんな人」と決めつけずに、「それぞれの向田邦子」を感じていただける構成を心がけています。

――

INFO
企画展「向田邦子の家時間～着ること食べること住まうこと」2023年1月23日(月)まで